

靖国問題

☆はじめに

三大学交流会という、普段は意見交換しがたい人ともしうるこの場で、「靖国」についていかに話していくのか。「靖国」というテーマは長く語られているが確固とした解決策が未だ見いだされていない。その理由として、それぞれの「経験、世代、思想、目的」をもとに様々な靖国を巡る認識の不一致があり、それが問題を複雑にしていることが一つあげられるであろう。で、あるならば、その問題を解決する方法を探る前提としてのわたしたちの靖国を巡る歴史認識をまず確立すること。この方法として、それぞれの食い違う認識をそれぞれ把握した上で、問題解決につながり、なおかつ互いが了承できるような場をつくることを試してみたい。そしてその上で政策を吟味していけたらとおもっている。

☆首相が靖国に参拝しておこった批判

- 1 政教分離 憲法の禁止する宗教的活動に当たるのではないか
- 2 中韓からの批判 国外との歴史認識の壁 政治のカードとしての靖国
中韓はともに小泉首相に非難の的をしぼった
ポスト小泉を意識しての批判
- A 級戦犯合祀 戦争責任を国内で負う主体はだれか
いかにして戦没者を悼むのか

☆ 靖国神社とは何か。

1 「遺族感情」戦死者の顕彰のための靖国

様々な遺族感情・・・・・・・・日本の遺族 国民
・・・・・・・・アジアの人々の遺族 国民
大日本帝国軍国主義の支柱
日本人の生と死のそのものの意味を吸収し尽くす機能
「日本人の戦死の意味をひいてはお国のために自らを捧げる
日本人の生と死の意味を国家という神絶対者が保証する体制」

2 「歴史認識問題」

合祀されているA級戦犯
A 級戦犯とは何か
極東国際軍事裁判 サンフランシスコ講和条約
二分論について
戦争責任を国内で負う主体は誰か
中韓はA級戦犯合祀に的を絞って、首相の参拝を非難する

3 「宗教面の位置づけ」

国家神道から宗教法人へ

靖国神社の歴史

明治元年	東山招魂社建立の太政官布告
明治2年6月	東京招魂社設立 戊辰戦争の殉難社を合祀
明治5年4月	陸・海軍省の管轄となる これを機に全国の招魂社の総社として位置づける
明治7年	明治天皇が初めて行幸
明治12年	靖国神社と改称 別格官弊社に格づけられる
昭和20年	終戦 GHQによって神道と国家の分離が叫ばれる
昭和21年	社格制度廃止 宗教法人靖国神社の登記を完了
昭和27年	GHQ廃止 靖国神社宗教法人の設立を公告

政教分離について

日本国憲法 第20条3項

「国およびその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない」

同 第89条 宗教活動への公金の支出を禁じる

津地鎮祭訴訟 1977年 「目的・効果基準」

「行為の目的が宗教的意義をもち、その効果が宗教に対する援助、助長、促進又は圧迫、干渉等になる」

4 「伝統」

靖国神社は日本の文化であるとして参拝を根拠づける

『文化』をこえた政治的意志の存在

5 「国家の政治的意志」

選ばれた特殊な戦死者である

現在の政府の靖国への立場、広報

戦後国家護持運動から小泉首相参拝推進まで

靖国神社を巡る諸課題は政局と深く関わっている

日本遺族会 日本遺族厚生連盟が前身 1953年に連盟となる
自民党の大票田であるといわれている。

☆それらを解消するための

0. 憲法改正 憲法の政教分離規定を「改正」する。
『我が国の伝統と歴史をふまえた物にするべきである。』

1. A 級戦犯の分祀 1978年に合祀された霊を他に移す
靖国神社側は神道の教義上分祀は不可能
それを政府が強制すると政教分離に触れる可能性もある
元宮内庁長官メモがはずみをつける

2. 非宗教法人化 宗教法人としての靖国神社が自主的に解散し、国が関与する特殊法人に移行する。解散するのかわからないし、特殊法人化しても宗教色が残ってしまっは政教分離に反する

3. 新追悼施設 戦没者追悼を目的とし、無宗教の国立追悼施設を新たに建設。
靖国神社の形骸化につながるとして遺族会が強く反発。

4. 千鳥ヶ淵戦没者墓苑の拡充整備
3 に同じ問題点を持つが、欧米諸国の無名戦士の墓のように公園化し、新追悼施設とする。

☆参考文献

- 『靖国問題』 高橋哲哉(著)、ちくま新書、2005年
- 『日本人なら読んでおきたい靖国神社の本』 別冊宝島編集部(編)、宝島社文庫、2006年
- 『歴史認識を乗り越える』 小倉紀蔵(著)、講談社現代新書、2005年

☆これから学んでいくならば

『歴史認識を乗り越える』 小倉紀蔵(著)、講談社現代新書、2005年

今回のこの三大学交流会の方法の参考にしました。靖国問題だけでなく、歴史認識が関わっていくテーマというのはたくさんあります。

この本では、「センター」としての場を作ってからそれぞれのテーマに応じています。アジアの中の日本という主体をどこにたたせるのか。

方法だけでなく、内容も「アジア」を知るにも適している本です。

『国家戦略からみた靖国問題—日本外交の正念場』 岡崎久彦(著)、PHP新書、2005年

靖国問題で中国に譲歩してはいけない。楽観論をとって国益を損なっては何にもならない。元外交官であり国際情勢分析の第一人者である著者が長期的視点から読み解いている。靖国問題にももちろん触れられているが、国家戦略がメインです。そのなかでの靖国の位置付けを学びたい人にはおすすすめ。ある出来事的外交においての意味というのが見えてきます。

『日本人なら読んでおきたい靖国神社の本』 別冊宝島編集部(編)、宝島社文庫、2006年

新聞記事をまとめた・・・というような印象を受けるが、学習の際の辞書代わりとして単語を調べたり、年表など資料を見るには便利。

『靖国問題の原点』 三木修平(著)、日本評論社、2005年

本書は、「靖国問題」がなぜ今その状態にあるのかということを考える上での一助になると思う。

『靖国問題入門 ヤスクニの脱神話化へ』 高橋哲哉(編)、河出書房新社、2006年

『靖国問題』 著者の高橋哲哉氏が編著している点、またサブタイトルの「ヤスクニの脱神話化へ」から連想できるように、基本的には靖国神社の孕む問題点を考えるきっかけになるテーマを提供している。特に戦死者の追悼についての議論は、様々な立場からの視点を提供しており、興味深い。